



再開、再会、それから…たくさんの「好き」を見つけて

校長 松崎 由里子

春、かわいらしい赤紫色の花をつけていた、ハナズオウ。校長室から放送室の外側に植えられているので、ご覧になった方もいらっしゃるでしょうか。いつの間にか、ハートの形の葉を茂らせ、花と同じ赤紫色の豆のさやがぶら下がっています。ミニ公園の池のハスも、朝見に行くと、白く可憐な花を咲かせています。アジサイも、淡い緑色のつぼみをつけるようになり、開花が待たれます。子どもたちのいない学校も、季節だけは確実に移ろっています。3月からの臨時休業の期間はおよそ3か月にも及びましたが、特にご家庭におかれましては、子どもの学習課題の取組について多くのご支援をいただきました。本当に、ありがとうございました。



さて、国の緊急事態宣言も解除され、待ちに待った学校再開の日を迎えることとなりました。2週間は分散登校、その後は短縮の午前授業と、感染防止に配慮しながら少しずつ教育活動を戻していきます。私たち教職員にとっては、2か月ぶりの子どもたちとの「再会」となります。子どもの不安な気持ちを受け止め、安心して学校に通えるようにするためにはどのような場を設けたらよいか…。教職員とともに思索を巡らせているときに、朝日小学生新聞に「外出自粛は宇宙と同じ」という記事を見つけました。宇宙飛行士の山崎直子さんの記事です。宇宙船や国際宇宙ステーションでは、限られた空間で、限られた人と数週間から数か月過ごします。その経験から、「体を動かすこと」「会えなくても、大切な人とコミュニケーションをとること」が大切だとおっしゃっていました。そして、今だからこそ、「たくさんの『好き』を見つけ、わくわくする気持ちを忘れないでほしい。」と結んでいます。

この記事から、「こんな時だからこそ」の、再会する学校の役割についてヒントをいただいたような気がしました。制限の多い教育活動の中でも、心と心が触れ合うようなコミュニケーションをとるにはどうしたらよいか、単調な生活の中でも、一人ひとりの子どもが、自分らしい『好き』を見つけていく、そんな力を子どもたちに身に付けるにはどうしたらよいか…。学校としても、これまで経験したことのない事態ですが、教職員みんなで力を合わせて、目の前の子もたちとのかかわりから、その答えを見つけ出すことができるよう、努力していきます。保護者や地域の皆様からも、忌憚のないご意見やアイデアをいただけたるとありがたいです。「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、鳥小の子どもたちのために、地域、保護者の皆様とともに取り組んでいきたいと考えています。

